

意識の拡大と脳による制約

— 臨死体験に関する一考察 —

齋藤忠資

臨死体験では、体外離脱後に個人意識が脳を超えて拡大するに伴って、知覚と思考がレベルアップし、宇宙全体と一体となると、知覚も完全になり、宇宙全体についての全知識を得るようになったと言われている。¹⁾

時間と空間のバリアから解放され、知覚は拡大し、空間的には360度視野や遠隔透視や内部透視やテレポーテーションになり、時間的には肉体をまもって生きていた時には知ることの出来なかった未来と過去の情報を入手したり、体験したりする。²⁾ 知識というのは情報であり、宇宙全体の全情報を入手するということは、宇宙を完全に理解するということである。また情報は記憶とも関係しているので、記憶が脳を超えていることを示唆している。この点は脳傷害者の場合には、事故の記憶は全くないにもかかわらず、臨死体験の記憶だけは長年鮮明に残るという謎の解明の糸口になろう。³⁾ しかし再び自分の肉体に個人意識が戻ると、全知識も殆ど思い出すことができなくなり、知覚も脳に制約された通常の状態に戻ると臨死体験では述べられている。ここでは脳が意識と知覚と知識を制約する装置として機能していることを示唆している。そこでこの小論では、まず臨死体験の事例を厳密に分析し、その結果を踏まえた上で、そのような現象を解明するような科学的な根拠を、特に脳を中心に考察してみたい。

A. 臨死体験の事例

① 個人意識の拡大

臨死体験者の個人意識は、自分の狭い脳と肉体という制約を超えて、宇宙全体へと拡大し、宇宙と一体となつたと言われている。代表的な事例を挙げよう。

「私は自分が光を通じて数マイルまで拡大し、それから又2・3フィートの卵型のエネルギーの一塊に収縮した。」⁴⁾

「私は愛、理解、共感である。私は病室を満たし、病院全体を満たした。町を超え、地球を満たした。宇宙と一体となつた。私は一度にどこでも存在した。私は鼓動する光を至る所に見た。愛する存在が私を包んだ。」⁵⁾ この例では、個人意識で宇宙全体に拡大するのは、遍在する愛によって生じるという点に注目する必要がある。

「私はすべての価値は身体にあったが、身体は消え去ってしまった。私の注意は自己である光のスパークに集中し、私の意識は時間と空間内の覚醒 (awareness) を超えて拡張し始めた。」⁶⁾

「私は爆発してしまうと思うまでに、拡大するのを感じた。」⁷⁾

「私は地上で持っていた制約された意識を持っていなかった。」⁸⁾

なぜ意識の拡張が生じるのかについては、4次元時空連続体の物質の世界を超えて、5次元界に移行することが原因と考えられる。⁹⁾

② 意識の拡大と知識の増大

臨死体験では、体外離脱後個人意識の拡大に伴って知識の増大が生じるという特徴がみられる。代表的な事例をみてみよう。

「超高速で銀河の中心を通過して飛行した。より多くの知識を吸収しながら・・・私が銀河の中心を通過して意識の流れに乗った時、この流れはエネ

ルギーのフラクタルな波という仕方で拡大した。・・・流れが拡大するにつれて、私の意識も宇宙のすべてのものを包むまでに拡大した。・・・私の意識はホログラフィック宇宙全体と接するまでに拡張した。」¹⁰⁾ この例では宇宙全体がホログラフィック構造になっていて、意識がエネルギーのフラクタル波という形で拡大していったと言われている点が重要である。

「始めは私の意識は私の能力と等身大であったが、やがて私の能力を超えた膨大な意識に包み込まれていった。膨大な意識が私の意識の中にとつともなく大きな流れとなって流れ込んできた。宇宙の創造から終わりまでの全情報が私の意識の中に広がった。」¹¹⁾ ここでは個人意識が宇宙意識と一体になると、宇宙の全情報が入手できるということが示されている。

「体外離脱後、リアリティの全体知識が私に現れ、私は宇宙の多次元的性をみた。私の意識は物理レベルを超えて拡大した。私は全体の一部分であり、区別はなかった。私には体の感覚がなく、制約や境界を感じなかった。・・・光の世界は愛と純粋な至福で満たされていた。」¹²⁾ この例では、意識の拡大と知識の増大が多次元界と関連していることを示している。

「光が私の意識の中に入ってきた。光は私の意識の場へと入ってきたので、私は光の中へと拡張した。・・・私の意識は光の至福と共に拡張し始めた。突然知識の全体場が私の意識の場に入ってきた。知識の一塊となって。」¹³⁾ ここでは意識の拡大が光によって生じることと、意識と知識が場として捉えられている点が重要である。

「星々が私の周りにトンネルを形成した。トンネルを前に進むにつれて知識が増した。私の心はスポンジのように成長し拡大した。知識は文章が一塊のアイデア全体の形でやってきた。私の心は拡張し、情報を吸収した。」¹⁴⁾ 最後の二つの例では、知識がバラバラではなく一塊になって量子のようにやって来ると言われている点に着目したい。

宇宙意識である光の人格体 (being) と一体になると、宇宙についての全情報を入手するという点については、すでに別の論文で考察したので、¹⁵⁾ ここでは幾つかの例を補うことにする。光の人格体が完全な知識を

持っているという例を挙げよう。

「光の人格体 (being) は、皆完全な知識を持っていた。この光の人格体と一体となり、完全な意識になると、私は全てのことがわかった。」¹⁶⁾

次に光の人格体と一体になると完全な知識を与えられるという例を挙げよう。

「光から完全な知識を与えられる。」¹⁷⁾

「私は大きな光の円錐の周りの軌道の中にいた時、宇宙の完全な知識を入手した。」¹⁸⁾

次に完全に理解できたという例を挙げよう。「私ははるか遠方まで見ることができた。私は過去・現在・未来を同時に体験した。すべてのものを理解できた。すべてのものに理由があった。」¹⁹⁾

次の例はこの全情報を光から授けられるは、臨死体験者の脳ではなく、霊であると言われている。「知識と洞察を受信するのは私の霊であって、私の脳ではない。知識は私の霊に蓄えられるのであって、私の脳の記憶ではない。」²⁰⁾ このことは、脳傷害の事例でなぜ事故自体の記憶は全くないのに、臨死体験の記憶だけは鮮明に長年残るかの解明の糸口を示唆をしている。

③ 知識・思考のレベルアップ

臨死体験者は、体外離脱後、知覚がより鋭敏になったと報告している。典型的な事例を挙げてみよう。

「私の感覚と覚醒 (awareness) の感覚は、肉体の外にいる時、とてつもなく鋭敏になった。」²¹⁾

「私が通常の5感に対して125感を備えているような感じだった。」²²⁾

「通常の視覚よりクリアでより焦点が集中していて、より明るい。」²³⁾

「この時知覚も思考も最高度に生き生きと冴え渡っていた。」²⁴⁾

「私の両目は以前よりよく見えた。物質界にいた時よりもよく見えるよ

うだ。私のヴィジョンは光速について行くことができた。」²⁵⁾ この例は、視覚のレベルアップは、光速について行けることにある点を示している点で注目に価する。

臨死体験の事例には、思考がよりレベルアップしたというものもある。

「現在では不可能なことが、あの時には可能でした。頭が非常にすっきりしていたのです。素晴らしかった。考え直したりせず、一発ですべてのことを理解し、解答を得たのは初めてでした。自分が現に経験している一切のことに潜んでいる意味をわずかな時間の内に、どういう訳か余す所なくなく理解していたのです。」²⁶⁾

「体外離脱後、思考は通常よりもずっと速くクリアになった。」²⁷⁾

R. Moody²⁸⁾ と K. Ring²⁹⁾ は、体外離脱後、視覚と聴覚と思考の能力はより向上し、聴覚の場合には言葉を媒介することがなくなると指摘している。

④ 完全知識と理解の忘却

K. Willimansは臨死体験のすべての点を肉体に戻ってから思い出せる人は誰もいないと指摘している。³⁰⁾ 臨死体験者は、すでに考察したように、宇宙についての全情報を獲得するようになるが、その全知識を肉体に再び戻った時には、完全な仕方では思い出すことはできないと証言されている。典型的な事例をみてみよう。

すでに引用した木内鶴彦は、膨大な意識に包まれて、宇宙に関する全情報を授けられたが、再び自分の肉体に戻ると、その時の内容の殆どの部分を思い出すことができなくなっていたという。³¹⁾

「私はその時、同時に至る所にいた。過去・現在・未来の事象と接触して、すべての知識を得た。宇宙全体と直接相互作用して、全知識を得た。しかし肉体に戻ると光との絆がなくなるので、全知識は消滅してしまっただ。」³²⁾ この例は臨死体験の個人意識が光によって宇宙全体と一体になる

ことで、全知識を入手することを示している。

「臨死体験の時に宇宙についての全体知識を得たが、肉体に戻ると思い出すことができない。」³³⁾

「光の世界では宇宙の知識と知恵が開かれていた。宇宙の真理を人に教えられるように、全部覚えておきたいと思ったが、こちらに戻ってきたら、一つも覚えていなかった。」³⁴⁾

光の人物 (being) と光の世界から教えられたことが忘却されてしまう例もある。

「光の人物 (being) から教えられた多くの知識を、肉体に戻ると思い出せない。」³⁵⁾

「光によって与えられた知識は、肉体に戻った時に忘却した。」³⁶⁾

「肉体に戻った後、光の人格体 (being) に言われたことを思い出そうとしたが、特別の 2、3 の言葉は思い出せなかった。光の人物 (being) は、罪についての答えは地上に持ち帰れるが、すべての事が関係している事柄についての答えは思い出せないと言った。光の人物が愛を行わなければならないということを言っていたことは分かっている。」³⁷⁾

「光から完全な知識を与えられたが、肉体に戻るとその知識を思い出せない。」³⁸⁾

「光の人物の助言のある部分を思い出すことができなかった。」³⁹⁾

地上の生を生きるのに必要な知識以外は、忘却されてしまうという例がある。

「光の世界から戻る時、地上の生に必要な知識だけを持って行けると言われた。」⁴⁰⁾

「肉体に戻ると、臨死体験中に得た知識のある部分は忘却された。例えば死ぬ時が分かるのは良いことではない。」⁴¹⁾

「その光の人物はここで学んだ知識のあるものは持って地上に戻れるが、他の知識はしばらくの間ヴェールで覆われるといった。」⁴²⁾

「宇宙についての完全なプランと人生の意味が臨死体験中には分かった

が、肉体に戻ると分からなくなってしまったという例もある。

「この世界は完全なプランに従って、どんな不合理で残酷なことでも意味を持っている。この時はその事が分かったが、地上に戻ると、もはや理解できなかった。」⁴³⁾

「光の世界にいた時、私は人生の意味が分かったが、肉体に戻った今は思い出せない。」⁴⁴⁾

その他の忘却の例をいくつか引用しよう。

「地上に戻るプロセスで、天において明らかになった洞察を地上に持って戻ることはなかった。」⁴⁵⁾

「臨死体験の時に、全知識を得たが、私が肉体に戻ると、この知識は消失し、今は何一つ思い出せない。」⁴⁶⁾

「私は信じがたい知識を得たが、今は思い出せない。」⁴⁷⁾

「私は臨死体験で得た知識の大部分を忘れてしまった。しかし真実は愛である。」⁴⁸⁾

「臨死体験に、未来の出来事や未来に出会う人々を知ったが、肉体に戻るとすべてを忘れてしまった。その後の人生である出来事が生じ、地上では一度もあったことのない人と出会うと、私はそれらの出来事や人々を知っていて、思い出すことがある。」⁴⁹⁾

「この世に戻れると、臨死体験中に教わったことや、自分の使命はすべて記憶から消されてしまう。・・・それは光の世界を思い出すと、不満だらけで地上の人生を送ることになり、地上での使命を果たせなくなるからである。」⁵⁰⁾

「ヴェールが下がってきて、臨死体験を忘れてしまうので、肉体に戻って目覚めると、急いで臨死体験を書き留めた。」⁵¹⁾

「肉体に戻ると、思い出すことは許されないと言われた部分を除いて、すべては明らかであった。」⁵²⁾

⑤ 脳と肉体による制約

臨死体験の事例の中には、脳と肉体が物質の世界を超えた世界のことを制約して、通常は分からないようにしているというものがある。代表的な例をみてみよう。

「事故で頭を強打し、呼吸と心拍停止した時、体外離脱した。私は肉体から解放されたことを喜んだ。肉体は制約している。肉体がいかにか私に見ること、聞くことの範囲を限定しているかが分かった。感覚を通して脳へと濾過される情報と刺激の代わりに、私はすべてを源から瞬時に直接吸収した。制約のないまばゆい色を見、以前聞いたこともない音を聞いた。それは思考と調和した振動の心地よい混合であった。私は真の自由を感じた。」⁵³⁾ この例では、脳と肉体という制約装置から解放されると、発信源から直接情報をキャッチするようになるので、それまで見たことのない色と、聞いたことのない音を見聞きすると言われている点が注目になる。また肉体から解放されると、真の自由を体験できたとされている点も看過されてはならない。

「肉体は霊的覚醒を妨害しているので、死ぬと霊は肉体から解放されるので、霊的な目覚めは鮮明になる。」⁵⁴⁾ この例は肉体が霊を妨害しているとしている。

「まるで私はカーテンの後ろで生きてきたかのようにだった。突然幻想のヴェールがなくなり、光が私を照らした。すべてはヴェールを被った霊であることがリアリティであることがわかった。死は単なる幻想である。私の意識は別の次元に移行する。」⁵⁵⁾ ここでは光が照らすと、すべてが肉体というヴェールを被った霊であることが分かると言われている。

「地上では真の存在を完全に理解する能力はない。この世の存在が終わると、それが可能となる。」⁵⁶⁾ ここでは肉体から解放されて初めて真の存在が完全に理解できるようになると述べられている。

他の臨死体験は「脳によって知覚を制約されているので、高次元界は知

覚できないが、体外離脱すると、そこには制約とか境界といったものはなかった。」と言っている。⁵⁷⁾ 別の例では「肉体は制約である。」と述べられている。⁵⁸⁾

臨死体験の内容の忘却も脳と肉体の制約が原因と言われている。「私は殆ど臨死体験を忘却した。それは脳が扱うことができないためである。しかし基本的なことは思い出せる。それは死は、存在の別の形態へのステップに過ぎない。別の世界では命は喜びであって、心霊現象や宗教現象といったものではないということである。」⁵⁹⁾

他の臨死体験者は「光の世界では普遍的な法則と神のプランについての情報を得たが、肉体に戻るとすべての知識を直ちに思い出すことはない。私の記憶は無制限であるが、多くの知識を処理する私の能力は、人間として肉体時には制約されている。将来必要な時に思い出すことができるが、地上の人間に戻ると忘却される。・・・肉体に閉じ込められていることが妨害であることが分かった。」と記している。⁶⁰⁾

「全知識は、この物質界で我々に課せられている制約の外にある。体外離脱すると、私はすべての時間、特に私の全生涯を知覚した。私はすべてのものを見て、見たすべてのものを記憶し、起こることを知って記憶することができた。しかし肉体に戻った時、それらを思い出せなくなっていた。」⁶¹⁾

「超意識あるいは純粹意識は脳と合体することによって制約されている。人間の心 (mind) は両者の合体によって生じるものである。肉体から解放されることで初めてすべてのことが分かった。」⁶²⁾ この例は、超 (純粹) 意識が脳と合体されることで、我々の個人意識 (mind) が成立しているので脳から解放されて初めてすべてのことが分かると言われている点で重要である。

以上臨死体験の事例を考察してきたが、ここでその結果をまとめてみよう。個人意識は肉体から離脱すると、脳と肉体の制約から解放され、個人意識は拡張、知覚や思考のレベルもアップし、知識も増大する。個人意識

(局所的)が、宇宙全体と一体になり、宇宙意識(非局所的)と一体になると、本来宇宙意識が備えている宇宙の全情報と完全知覚を獲得する。宇宙意識は物質の世界を支配している時間と空間のバリアを超えている。宇宙意識は宇宙に関する全情報を所有している。肉体に再び戻ると臨死体験時の全知識と完全知覚が忘却され、地上に生きるのに必要な情報だけが残される。このことは人間の脳は、この宇宙意識の情報を制約し、その一部だけしか受信していないことを示している。

B. 制約装置としての脳・肉体の科学的解明

臨死体験の事例の考察の結果は、脳と肉体は知覚と情報の発生器ではなく、むしろ無限の情報の内、地上で生きていくのに必要な情報のみを受信している可能性を示唆している。受信するという事は、同調するという事であり、ある特定の周波数のみを受信することによって、他の情報はカットしてしまう。また脳は意識の発生器ではなく、宇宙意識の受信器にすぎない可能性も示唆している。このような可能性は、科学的にも根拠のあるものなのだろうか？以下その科学的な解明について考察してみよう。

① H. Margenauによれば、人間の心はthe universal mindの一部なので、本来時間と空間のバリアから自由(非局所的)であるが、実際には①時間の隙間(タイム・スリット)、②個の壁、③量子の確率論的な壁という肉体上の制約を課せられているために、時間と空間の分離の中にある(局所的)という。人間はタイム・スリップに制約されているので、現在しか分からない。過去は記憶にとどめるが、未来のことは分からない。タイム・スリップがなくなれば、未来のことも分かるようになる。肉体は人間に個という壁を作らせるので、他者との分離と、個(ego)が発生し、本来のthe universal mindのoneness性を喪失してしまう。さらに量子論の確率論は、この物質界の事象が不確かで、偶然なので、我々がある偶然を選択

しなければならないことを意味している。個の壁が低くなれば、他者との共生と一体性（愛）が増し、物質を超えたthe universal mindへと向かい、超感覚的知覚も可能となる。⁶³⁾

② D. H. Lundによれば、脳から独立した一つの宇宙意識か超越的自己が存在し、宇宙意識と超越的自己の全知識と完全知覚を、脳は地上に生きるのに必要なものだけに選択抑制している。⁶⁴⁾ 脳の抑制が弱くなったり、死によってなくなれば、意識の拡大が生じる。⁶⁵⁾ 臨死体験で知覚等がよりレベルアップしたり、life reviewのような異常な記憶のフラッシュバックが生じたり、死後の記憶が忘却されたりするのも、脳が選択的抑制器であるとすれば説明がつく。⁶⁶⁾ つまりD. H. Lundによれば、脳は死後の記憶も抑制しているのである。またD. H. Lundは、意識の場の中に肉体があるのであって、肉体や脳内に意識があるのではないと主張している。脳は宇宙意識を地上の生に制約するために肉体脳内に閉じ込める。従って体外離脱は、意識は脳内にあると思われる通常感覚から、肉体の方が意識の場の中にあるということが分かる状態へとシフトされた出来事である。⁶⁷⁾ また個人意識が脳の制約から解放されて、宇宙意識と一つになるのが神秘体験である。⁶⁸⁾

さらにD. H. Lundは、死後の意識と通常意識の関係を、夢を見ている状態と目覚めている状態に譬えている。夢をみている状態（lucid dreamは含めない）と目覚めている状態の両方に自己が存続していて、夢は人生のエピソードでしかないと分かる。しかし夢をみている時は目覚めている時と自己が同じであり、夢は人生のエピソードでしかないと分からないと言っている。⁶⁹⁾

臨死体験は個の物質の世界での生という夢から、脳による制約から解放された完全な状態（宇宙意識）への目覚めであれば、臨死体験の世界が個の物質の世界よりもレベルが上なものも理解できよう。夢をみているこの物質の世界で生きている間は分からないが、同じ自己がこの物質世界でも、

死後の世界でも存続し、より完全な世界で目覚めた時、物質の世界での生が、夢と同様エピソードに過ぎないことが分かるものと思われる。

③ A. Huxleyは、人間は本来Mind at Largeを備えているが、Mind at Largeの膨大な情報から、地球の表面で生きていくために必要な情報だけを、脳の減少バルブによって絞り込んで受信していると唱えている。我々はこの減少された情報からこの通常の世界を作り出し、この世界がすべてであると思込んでいるという。バイパスによってMind at Largeを例外的に知ることがあるが（神秘体験、催眠、サイケデリック剤等）、この場合でも脳の減少バルブ作用は弱っているだけで、完全になくなっている訳ではないと見て、次の様に記している。⁷⁰⁾

「それまでは水も漏らさぬようになっていた減量バルブは緩んで、その隙間から生物学的には無用な宇宙精神（Mind at Large）の意識内容がどっと滲み出している。その意識内容は、時には超感覚的知覚であることもある。ある人々はヴィジョンの美の世界を見出し、ある人の前には裸の実在、そこに与えられたもので概念化されない生の事象の光輝や無限の価値、意味深さといったものが見えてくる。そしてエゴの無くなった極地には、“全て”は全ての事物に存在し、同時“全て”は個々の事物でもあるといった“漠たる認識”が生じてくる。私は有限の心が“宇宙のどこで起きていることでも、その全てを知覚できる”ようになるとは、これに近い状態のことをいうのだと思っている。」⁷¹⁾ここで注目し値するのは、「Mind at Large」という宇宙意識を思わせる存在が無限の情報内容を持っており、脳の減少バルブ機能が弱まると、超感覚的知覚が生じ、それまでは気づかなかった美・価値・意味や光輝を体験し、量子のコヒーレンスな世界のように、全てのものが不可分の仕方で一つの統合体を形成して、宇宙の全ての事象が知覚できると言われている点である。⁷²⁾ また上記に述べた諸説のように、脳が宇宙意識を受信することによって、通常個人意識が発生するのであれば、個人意識のルーツは宇宙意識にあることになるので、

個人意識が宇宙意識を出会った時に、自分の真のhomeに戻ったと感じるのは当然のことと言えよう。

④ A. Huxley説は、全体が個の中に存在しているという点でホログラム説と同じであるが、脳のホログラム説を唱えているのはK. Pribramである。彼によれば、宇宙は本来D. Bohmのいう包み込まれた秩序から出来ているが、ここは干渉パターンからなる波動領域であるという。脳がカットしてしまう根源的な真の実在領域があり、脳のセンサー能力がもっと優れていれば、通常は受信できない周波数領域を受信可能となる。神秘体験はそのような例である。⁷³⁾

ホログラムでは、どの部分も全体の情報を共有している（包み込まれた秩序）が、参照レーザー光を照射して初めて、包み込まれた秩序（2次元のフィルム）は開示されて3次元立方体が現出する。従って5次元界のコヒーレンス光な宇宙意識は、すべての部分を不可分の仕方では一体になった統合体で、全情報と完全知識を備えているが、宇宙意識から投影した（ホログラム）個人の意識は肉体と脳（4次元時空連続体）に制約されているために、情報も知覚も限定されている。しかし肉体から解放されて、宇宙意識と一つになれば、個人意識も全情報と完全知識を本来備えている属性として開示される。個人意識が隠された仕方ではあるが、本来完全知識を備えていることが臨死体験によって明らかになる。

「私はすでにすべてのものに対する答えを持っていた。我々は皆我々の存在（being）内に、すべての知識を持っている。」⁷⁴⁾

「死んだ兄が言った。“すべてのことは知られている。あなたは単に忘れてしまっただけだ。” すべてを知っている所が私の中にあった。」⁷⁵⁾

もっともD. BohmとK. Pribramの唱えるホログラム説は、物心体の一元論なので、体外離脱現象を（自己意識が肉体と分離する）どのように説明できるのかという課題は残る。

⑤ P. Fenwickは、W. Jamesの脳が意識の発生器ではなく、伝達器であるという説を受け入れ、mindが脳に伝達されて行動を起こすことが出来ると考えている。記憶の大部分は脳の外に蓄えられていて、個人的なアイデンティティの中にあるので、死後の個人的なアイデンティティの存続を可能にするともっている。⁷⁶⁾

⑥ D. Darlingも意識は物質の付随現象ではなく、宇宙の根本的なリアリティであるとしている。彼によれば脳は地上に生きるために必要な情報だけを選択して受信し、宇宙の無限の潜在的可能性には直接触れないようにしている。脳は個人（ego）を生み出し、世界を主体の客体とに分割させる。⁷⁷⁾

⑦ H. Bergsonは記憶の全体を構成する無意識の心的領域自体は、本来脳から独立したものであり、脳は身体行動に必要な記憶を選択して無意識から引き出すスイッチのような役目をしているとみている。またC. Jungは、脳は変換器のようなもので、心自体の無限の強度を身体で知覚できる振動数に変換しているが、脳と身体による制約がなくなると、体外離脱に見られるように、心は身体を超えて拡張すると主張している。⁷⁸⁾

C. 結 び

以上で考察を終えたので、最後に臨死体験全体との関連について展望を述べてみよう。我々はすでに臨死体験を4次元時空連続体の個人意識から5次元界の宇宙意識への移行という説を提唱した。⁷⁹⁾ この移行が脳によって生じるのであれば、4次元時空連続体（肉体）に制約されている個人意識（局所的）は、5次元界で宇宙意識（非局所的）と一つになって、宇宙意識の備えている全知識と完全知覚を獲得することになる。脳は通常5次元界を知覚出来ないので、通常我々には全知識を完全知覚は不可能であ

る。5次元界の宇宙意識には時間と空間によるバリアといったものはないが、脳が意識を肉体（4次元時連続体）に閉じ込めることによって、時間と空間の制約を受けることになる。

[註]

- 1) 拙論、「不可分の統合体としての光の世界」、人間文化研究13、2004、1～22.
- 2) 拙論、「時間と空間の分離を超える意識」、人間文化研究12、2003、1以下.
- 3) 拙論、「脳死と臨死体験の記憶」、人体科学、11巻2号、2002、31～38.
- 4) K. Ring, *Lessons from the Light*, Insight Books, New York, 1998, 14.
- 5) J. Antonette, *Whispers of the Soul*, Quicksilver Productions, Mt. Shasta, CA, 1998, 27.
- 6) K. Williams, Near-Death Experiences and Afterlife (website), L. Goodman.
- 7) K. Williams, Near-Death Experiences and Afterlife (website), M. Tweddell.
- 8) K. Ring, *Lessons*, 45. 臨死体験の意識の知覚が、非物質界へと拡大するという点については、Anja Opdebeek, A qualitative empirical study into near-death experiences and the effects on the persons involved, <http://users.pandora.be/limen/ndeurope/articles/ndestudyanja.html>; L. Kattein, Near-Death Experience FAQ, www.spiritweb.org/spirit/nde-faq.html.
- 9) 典型的な事例としてはD. Goble, near-death experience, www.artnet.net/dgoble/nde.html,である。拙論「5次元界モデルと超意識体」、人体科学14巻1号、2005、41～49；「4次元空間と臨死体験」、人間文化研究、9、2000、1～22を参照。
- 10) Mellen Thomas Benedict, *Through the light and beyond*, in L. W. Bailey & J. Yates (eds.) *The Near-Death Experience*, Routledge: London, 1996, 44.
- 11) 木内鶴、『宇宙の記憶』、龍鳳書房、1995、92.
- 12) D. Goble, Near Death Experience.
- 13) K. Ring & E. E. Valarino, *Lessons*, 295.
- 14) K. Ring & E. E. Valarino, *Lessons*, 295.
- 15) 拙論「不可分の統合体としての光の世界」注の1)
- 16) Lisa's NDE, website: nderf.org.
- 17) J. Cressy, *The Near Death Experiences*, The Christopher Publishing House, 1994, 28.
- 18) Roger C's NDE, website: nderf.org.
- 19) Rozee C's Experience, website: oberf.org.
- 20) <http://www.near-death.com/form/0145.html>.

- 21) S. S. Farr, *What Tom Sawyer Learned from Dying*, Hampton Road's Publishing Company, Norfolk, 1993, 25.
- 22) K. Ring, *Lessons* 45.
- 23) M. Sabom, *Light and Death*, Zondervan Publishing House, 1998, 41.
- 24) 鈴木秀子、『神は人を何処へ導くのか』、クレスト社、1995、15.
- 25) <http://www.aleroy.com./board215.htm>.
- 26) R. A. Moody, *Life After Life*, Bantam Books: New York, 1976, 51.
- 27) <http://www.near-death.com/form/0101.html>.
- 28) *Life*, 51~52.
- 29) *Life at Death*, Quill, New York, 1982, 91~94.
- 30) *Nothing Better Than Death*, Xlibris corporation , 2002, 60.
- 31) 木内鶴彦、『宇宙の記憶』94.
- 32) T. L. Baumann, *God at The Seed of Light*, A. R. E. Press, 2001, 51~52.
- 33) K. Ring, *Heading toward Omega*, Quill, New York, 1984, 199.
- 34) M. セボイム、『「あの世」からの帰還』、日本教文社、1987、125.
- 35) K. Ring & E. E. Valarino, *Lessons*, 295.
- 36) Nancy P's NDE, website: nderf.org.
- 37) www.near-death.com/smith.html.
- 38) J. Cressy, *The Near-Death Experiences*, 28.
- 39) K. Williams, *Nothing*, 33.
- 40) S. Rogers, *Lessons from the Light*, A Time Warner, 1995. introduction.
- 41) K. Williams, *Nothing*, 43~44.
- 42) P. M. H. Atwater, *Children of the New Millennium*, Three Rivers Press, New York, 1999.
- 43) K. Williams, www.near-death.com/smith.html.
- 44) Sammy's NDE, website: nderf.org.
- 45) B. Brodsky's NDE, www.near-death.com/brodsky.html.
- 46) R. ムーディ、『続かいまみた死後の世界』、評論社、1989、17.
- 47) Sam Ps NDE, website: nderf.org.
- 48) Ellen K's NDE, website: nderf.org.
- 49) Lisa's NDE, website: nderf.org.
- 50) B. イーディー、『死んで私が体験したこと』、同朋舎出版、1995、177~193、133.
- 51) K. Williams, *Nothing*, 64.
- 52) D. Holman's NDE, www.near-death.com/forum/0041.html.
- 53) Ph. L. Berman, *The Journey Home, Pocket Books*, New York, 1996, 39.
- 54) www.near-death.com/landry.html.
- 55) www.near-death.com/forum/0056.html.

- 56) Debra's NDE, website: nderf.org.
- 57) D. Goble, www.beyondtheveil.net/nde.
- 58) Ph.Berman, *Journey*, 34.
- 59) Brill's NDE, website: nderf.org.
- 60) N. Dougherty, *Fast Lane to Heaven*, Hampton Roads Publishing Company, 2001, 21. 26.
- 61) Garry B's Experience, website: oberf.org.
- 62) www.treasurechest.com/nde.htm.
- 63) *The Miracle of Existence*, Ox Brow Press, 1984, 120~123.
- 64) *Death and Consciousness*, McFarland and Company, 1985, 79. 31~32.
- 65) 同書、36.
- 66) 同書、36.
- 67) 同書、92~94.
- 68) 同書、31.
- 69) 同書、31~32.
- 70) 『知覚の扉・天国と地獄』、河出書房新社、1984、21~23.
- 71) 『知覚』、25.
- 72) 拙論、「時間と空間の分離」、1 以下
- 73) K. ウィルバー編、『空像としての世界』、青土社、1984、23. 51 ; *Omni* 5, no.1, 1982. October.
- 74) Rozee C's Experience, website: oberf.org.
- 75) L. Martin, *Searching for Home*, Cosmic Concepts, Michigan, 1996, 19~20.
- 76) *The Truth in the Light*, Headline, 1996, 370.
- 77) *After Life*, Fourth Estate, London, 1995, 158. 161.
- 78) 湯浅泰雄、『宗教経験と身体』、岩波、1997、224~225.
- 79) 拙論、「五次元モデルと超意識体」、*人体科学*14巻1号、2005、41~49 ; 拙論、「4次元空間と臨死体験」、*人間文化研究*9、2000、1 以下